



特別賞 紀伊國屋書店賞

書評 灰谷健次郎著 『兎の眼』（角川書店、1998）

（和泉特設コーナー：角川文庫 10634）

文学部3年 羽生真志

「いまの人はみんな人間の命を食べて生きている。戦争で死んだ人の命をたべて生きている。戦争に反対して殺された人の命をたべて生きている。平気で命を食べている人がいる。苦しうに命をたべている人もいる。」（P323）

この本『兎の眼』は、17年の教師経験を持つ、20世紀の日本文学を代表する文豪、灰谷健次郎さんの代表作である。小学一年生を受け持つことになった新任教師、小谷芙美を中心に展開する小学校の教育現場を生々しく描いた作品で、学校では口を開こうとせず他教師から問題児扱いをされている一年生の鉄三や、養護学校に入るまでの一ヶ月間だけ小谷学級に仲間入りする知恵おくれのみな子に対して小谷先生がどう考え、何をしていくのかが語られていく。児童文学であるが、学校教育の荒廃が叫ばれ、教師の質、学校の質が非難されることの多い現代において、教育者たる教師がどういう志で生徒と触れ合うべきなのかを教えてくれる、教育者のためのバイブルでもある。

しかし本書は、教育者だけではなく人間誰もが持つべき倫理観、道徳観を読者に示してくれる。小谷先生は教師として幾人もの生徒を相手に教育を試みるが、実は彼女は逆に生徒から多くのものを教わる。無垢ゆえにただひたむきに必死に生きる生徒たち。日々を必死に生きているのに教師にしっかり見てもらえず、虐げられていく彼らをみて小谷先生は行動を起こす。途中でなんども挫け、何度も泣くが、教師としてではなく一人の人間として接してくる小谷先生によって心を開き、自らの可能性という「たからもの」を輝かせる生徒たち。その輝きは、大人達の凝り固まった偏見を正し、見ているようで実は「見ようとしていなかった」生徒の真っ直ぐな姿を映し出す。彼らも必死に生きている。しかし、世の中の人間の多くが、弱者のことを理解したようにみせかけ、実は否定しているだけのことが多い。「よわいもの、力のないものを疎外したら、疎外したものが人間としてダメになる。」（P297）子供達の成長によって、小谷先生ら大人たちはこのことに気づかされるのだ。人間の在り方について、この本は提起している。

私は中学校の教員を目指している。教育者の必読書としてこの本を読んだのだが、この本は教育者ではなく、人間の必読書である。冒頭で引用したのは、筆者の分身とも取れる、不良教師足立の言葉である。「世の中には平気で人の命を食べている人がいる。」これは、生徒の可能性をないがしろにする教育者全員を指し示しているとも解釈できる。いや、無意識にでも相手を否定する人間すべてに当てはまるだろう。相手のことを本当の意味で理解し、認め合うこと。人間に最も必要なこの心を持つために、人は苦しみながら生きていくのだ。これが苦しうに命を食べることであり、本書が伝えてくれる我々人間の生き様である。